

私財を投じ図書館寄贈

勇者の挑戦

ぎふ財界人列伝
バローホールディングス編

2007年7月、恵那市の中心市街地に鉄筋コンクリート2階建ての市中央図書館が開館した。バロー創業者の伊藤喜美が晩年、青少年育成のため、私財を投じて生まれ故郷に寄贈した。愛称は「伊藤文庫」。竣工式で、伊藤は「想像以上に立派なものに仕上がった」と感慨深げに見つめ、「維持、運営面でも支援を続けたい」と継続的なサポートを約束した。

伊藤が図書館を贈るきっかけは、過去の体験にあった。太平洋戦争による学徒動員で法政大を仮卒業し、入隊した陸軍中部第4部隊(岐阜68連隊)。



「伊藤文庫」を紹介する銘板の写真で妻友子と寄り添い、穏やかにほほ笑む伊藤喜美

社会貢献

◇◇5



寄贈した恵那市中央図書館の開館5周年記念式典で講話する伊藤喜美＝2012年7月



青少年育成のため伊藤喜美が寄贈した恵那市中央図書館(伊藤文庫)＝6月16日、同市長島町

「(死を覚悟して)戦争に行ったら、もう本は読めなくなる」。日々、猛烈な演習が終わった後、寸暇を惜しんで読書に没頭した。

人生に影響を与える本を若い時に十分に読めなかった。あんなつらい思いを若い人にさせたくない。「次代を担う子どもたちに豊かな人間性、社会性を形成してもらおうのに役立ててほしい」と思いを形にした。

伊藤が設立し、理事長を務めていた財団法人伊藤青少年育成奨学会は、恵那市に図書館と2万3千冊の蔵書の寄贈を申し出た。当時の趣意書に「知の殿堂として図書館を建設し、永きにわたって活用していただきたいと、ここに寄付いたします」とある。趣意書を

市長に渡した伊藤は、「生まれ育った恵那市に立派な図書館を寄贈できたらというロマンを約20年にわたって描いてきた」と抱き続けた思いを伝えた。

申し出を受け、市は市民団体代表者らで図書館建設協議会を立ち上げた。市民の意見を取り入れ、市民が誇れる「知の殿堂」を基本理念に人間形成、自己研さんの場として、総事業費10億円をかけた図書館が完成した。太陽の光が心地いいガラス張りのテラス、乳幼児に絵本を読み聞かせる部屋、茶室も設けられた。

「子どもたちに本を」という伊藤の意向を受け、伊藤文庫は子どもの読書に力を入れた。ブックスタートの本をプレゼントし、子ども園の入園時から

卒園までに50冊を読むと、本を1冊贈った。小中高校生それぞれを対象にした企画も開催し、本が好きな仕掛けを継続的に実施した。幼少期から青少年までの蔵書を充実させるとともに、毎月第3日曜日を「恵那市読書の日」と定め、市民に読書を奨励する。蔵書数は開館当初の20万冊から約23万3千冊に増え、人口5万人の地方都市としては充実した図書館になった。

伊藤青少年育成奨学会は、バロー相談役名誉会長だった伊藤が個人資産から寄付した現金4億円と、バローの株券120万株(当時17億円相当)の計21億円を財産に、1999年に設立。「青少年育成も地域貢献」という伊藤の考えから、利息と配当の運用益で青少年の健全育成に助成金を贈っている。困窮する大学生への奨学金、高校運動部とスポーツイベントへの助成、文化、教育、国際交流活動への援助と、奨学会がこれまでに支給した金額は12億円を超える。

2012年7月、伊藤文庫は開館5周年を迎えた。記念式典で講話した伊藤は「書物は文化の結晶。言葉なくして思考はなく、思考なくして人格はあり得ない。良書を読むことほど、多くの言葉に接する方法はない」と語り掛けた。図書館を寄贈した年、伊藤は恵那市合併後最初の名誉市民に選ばれ、「古里に褒められるのが一番うれしい」と喜びを語っている。この言葉を表すかのように、伊藤文庫の入り口に飾られた銘板の写真には、妻友子と寄り添い、穏やかにほほ笑む伊藤がいる。伊藤の深い郷土愛が詰まった図書館は、いまも市民に親しまれている。(敬称略)